

ひがしあげ

# 東上遺跡表採鍛冶関連遺物についての予察と展望

—唐津市中原遺跡との比較を中心として—

立 谷 聡 明

2024年 5 月

『西海考古』第14号 抜刷

# 東上遺跡表採鍛冶関連遺物についての予察と展望

－唐津市中原遺跡との比較を中心として－

立谷 聡明

## 1. はじめに（本稿執筆の経緯）

筆者は以前、唐津市中原遺跡から出土した鍛冶関連遺物に関する再検討を試みたことがある（立谷 2022a）。また、西北九州地域と有明海沿岸地域との関係について触れた拙文（立谷 2022b）を『西海考古』12号に掲載いただいたのも、ほぼ同時の出来事であった。奇しくも同号には、長崎市東上遺跡から表採された遺物について、渡邊康行氏らによる報告が掲載されていた（宮下ほか 2022：以下12号報告）。

偶然ながら上記のような縁に恵まれ、2022年7月には、東上遺跡から表採された礫や小鉄器を実見させていただいた。その後も、渡邊氏の尽力により椀形滓を含む表採遺物数は増加の一途をたどり、2023年10月には表採地点の現地踏査と、再び鍛冶関連遺物を観察する機会を得た。

本稿では、鍛冶に関連するとみられる東上遺跡の表採遺物群に対し、筆者の観察結果の概要を報告し、現状での予察や今後の展望についてまとめさせていただきたい。

## 2. 鍛冶関連遺物表採地点の確認（図1）

東上遺跡やその近隣の遺跡を含む地理的環境については、すでに12号報告にて詳細に検討されている。そのため今回は、遺物表採地点周辺の立地や標高差などを重点的に確認しておきたい。

東上遺跡は、五島灘に面した西彼杵半島南西部の砂丘微高地上に立地する（図1）。遺跡周辺の基盤は、1967（昭和42）年の長崎大学調査団によって実施された試掘調査（図2：■）にて、表土層の下位に玄武岩の円礫を主体とする礫土層が堆積していることが判明しており、12号報告によれば、この礫土層を砂層が覆っている。

西彼杵半島西岸は、複雑に入り組んだ海岸線が連なって大小の入江を形成しており、入江の奥には砂堆が発達し、縄文時代前期以降、人々の生活の場として利用されている。改めて、国土地理院が提供する標高図（図2）により、周辺の地形・高低差を確認すると、東上遺跡周辺の湾岸地帯は、丘陵直下に海岸線が迫り、わずかに砂堆が形成されている状況に対し、三重川の河口西側付近のみ、砂丘微高地（三重砂丘）の発達がいちじるしい様相がうかがえる。



図1 本稿で扱う主な遺跡分布

この三重砂丘は、北・西側の丘陵地帯から、東側を南流する三重川に向かって複数本の砂丘列が延びだしているように見える。遺物表採地点は、最も三重川の上流側かつ、最も東側に細く延びる砂丘列上に位置している（図2：★）。この砂丘列の南側縁辺部（標高約4m）からは、1968（昭和43）年の水道工事の際に、箱式石棺や甕棺がみつかり、甕棺片はのちに工事の埋戻し土中から採取され、弥生時代中期後半～後期初頭のものとして評価されている（宮下 2013、古門 2022）。

遺物表採地点は、埋蔵文化財包蔵地としての東上遺跡からはわずかに外れているものの、砂丘列の高所（標高約5m）に位置しており、当該地点まで包蔵地範囲が拡大する可能性は十分考えられる。

筆者が現地を案内していただいた際、河川に向かって延びだす海にほど近い砂丘上から鍛冶関連遺物がみつかる状況は、唐津市中原遺跡の立地との類似性が想起された。中原遺跡からは、断続的ながら、弥生時代～古代にかけての鍛冶関連遺物が出土している。したがって、まずは中原遺跡の鍛冶関連遺物について概要を確認後、東上遺跡表採鍛冶関連遺物との比較検証を試みたい。

### 3. 唐津市中原遺跡の立地と調査概要（図2）

中原遺跡は、唐津市中央部を北流する松浦川右岸の標高約4mの砂丘微高地上に位置する。この砂丘微高地は元々、鏡～原～久里地区にわたって形成されていた海岸砂丘列が、宇木川・半田川によって開析・分断されたものと考えられている（井関 1982）。海岸砂丘が分断された痕跡は、筋状に点在する砂丘列間の低地部（標高3m以下）の存在から現在でもその一部が認識可能である（図3：左上）。

西九州自動車道の敷設に伴い実施された調査は、中原遺跡が広がる砂丘微高地のほぼ全域と、その北側に隣接し、中原西ノ畑遺跡が広がる微高地の南側縁辺部に対して行われ、弥生時代～古代にわたる集落・墓地群が検出されている（小松ほか編 2012など）。弥生時代末～古墳時代における鍛冶工房は、遺跡北西端の12区に集中し、当時の松浦川河口付近に面した場所が選択されていることがうかがえる（図3）。

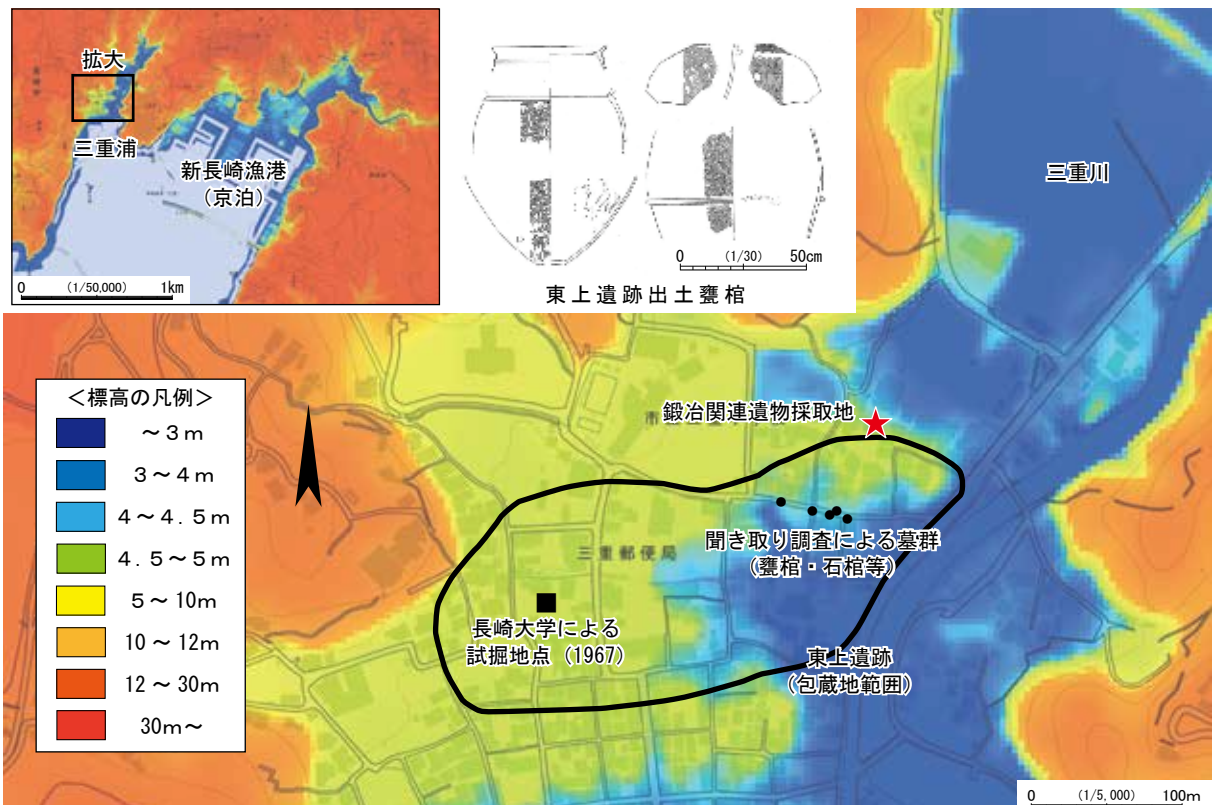


図2 東上遺跡周辺の地形と遺物の出土・採取地点（1/5,000）

表1 中原古墳群の概要と出土鍛冶関連遺物

古墳名 (ST)	墳形	時期	出土 椀形滓	出土 羽口	その他特筆遺物
12032	前方後円墳	タケ里式 (新)	I類 1	—	弥生時代の鍛冶工房由来の鉄片・鉄器多数
11002	帆立貝形 前方後円墳	TK208 以前	I・II類 1 III類 5	—	雛形鉄器(石突)1、鉄矛1
11141	円墳	TK208 -TK23	II類 1 III類 3	—	器材埴輪片 2、鉄矛1、鉄鐸6 無遊環鎌鍬 1、無引手鎌鍬 1
11067	円墳	TK47	I類 5	甲群 1	環状鏡板付替 1、 人形土製品 9、水晶原石 4
12002	円墳	TK47 -MT15	—	—	U字形鋤鋤先
11158	前方後円墳	TK43	II類 1 IV類 1	乙群 1	陶質土器5

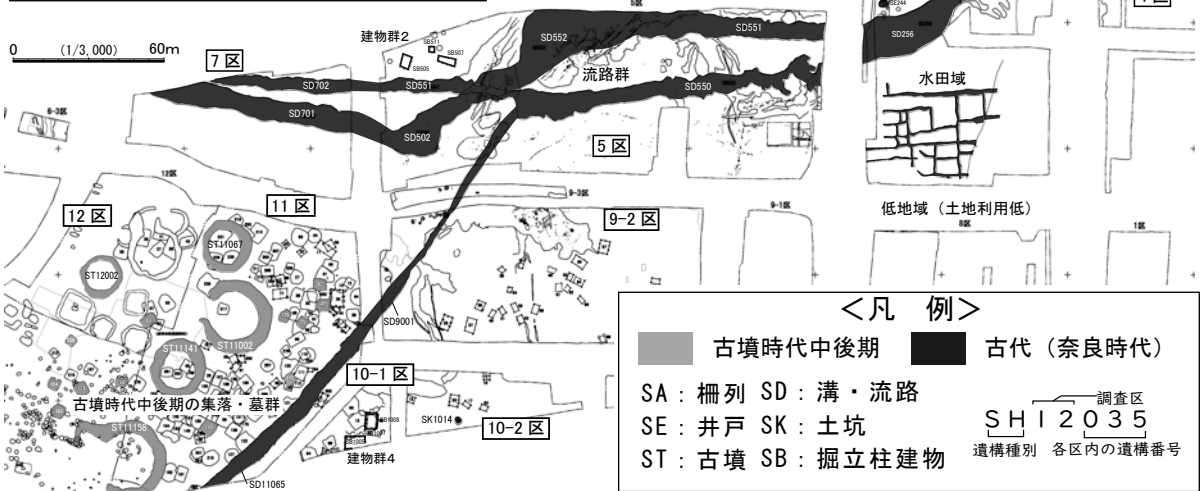
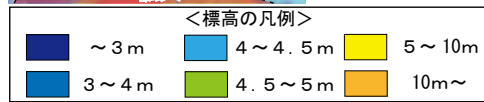
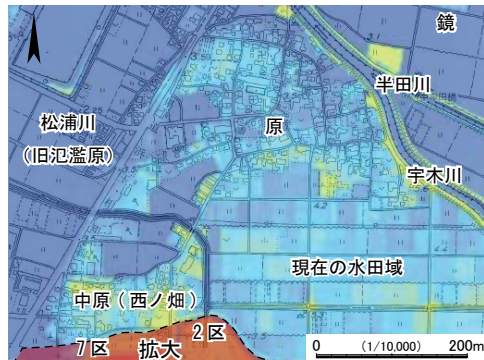
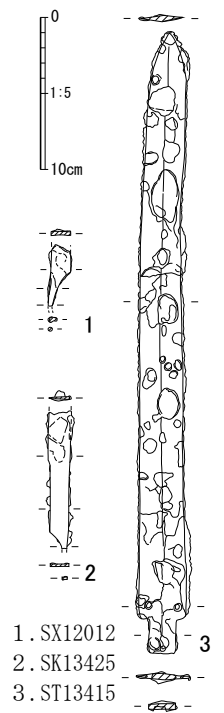


図3 中原遺跡遺構配置図一部抜粋 (S = 1/3,000)

東上遺跡や中原遺跡のように、海に面した砂丘列上に鍛冶工房が存在したことを示唆する事例は、古墳時代後期の遠賀川流域でも確認されており、「鉄器生産の村」とも評価されている(小嶋 2022)。類似した事例のさらなる検討も今後必要であろう。

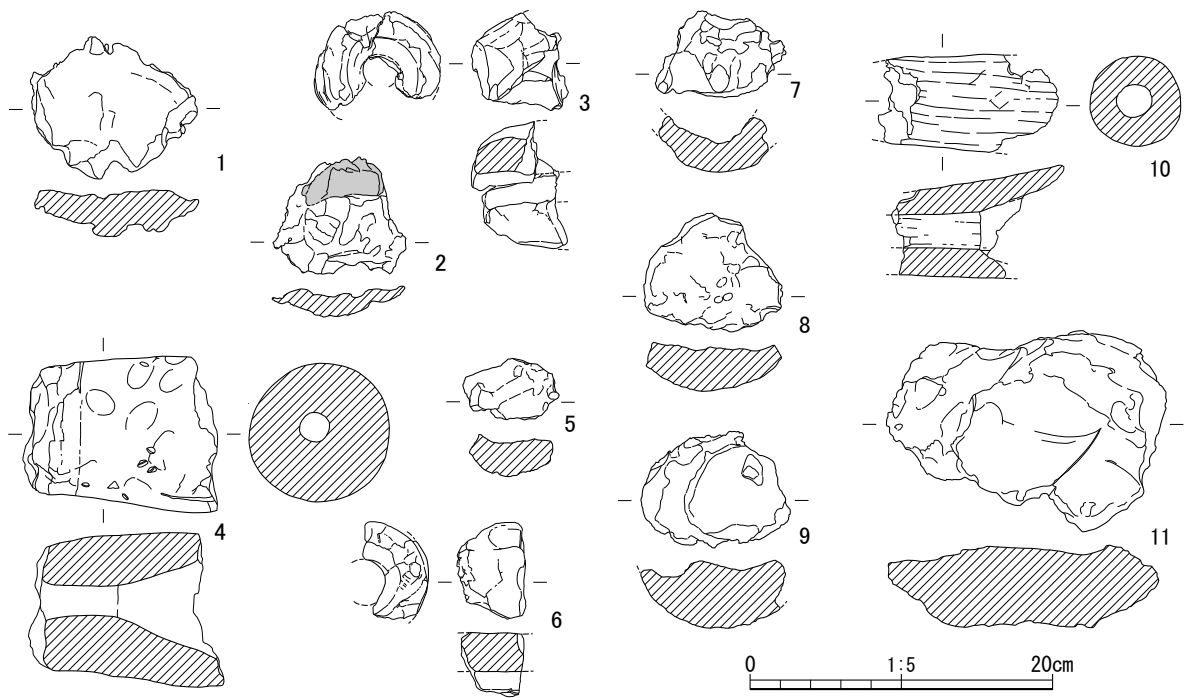
さて、中原遺跡出土鍛冶関連遺物は、12区を中心とする弥生時代後期後半～古墳前期に属するものや、古代に属する可能性が高い7区・10-2区から出土したもののほか、9区の溝・流路や11区の中後期古墳の周溝から出土した想定時期幅を持つもの(表1)に分かれる傾向にある。このうち、羽口や椀形滓については、古墳時代前期の鍛冶技術の革新を示すものと考えられていた(小松 2012、村上 2020・2022)。

これに対し、筆者は古墳時代前期の中原遺跡において明確な鍛冶工房が確認できないことや、弥生時代終末期の工房を削平して築かれた古墳の周溝からも椀形滓が出土している状況を再整理した。また、弥生時代終末期段階で、工房跡出土未製品と墳墓出土品が類似すること(図4-1・2)や、同時期の出土鉄剣で類例の少ない型式である、刃部断面が薄い菱形を呈する鉄剣(図4-3:ライアン 2017)が中原遺跡に集中することから、すべての羽口を安易に古墳時代前期以降と捉えるべきではなく、弥生時代終末期段階での羽口使用の可能性を想定した上で、当該期の副葬鉄器を評価すべきであることを指摘した。さらには、古墳時代中後期の古墳周溝出土鉄滓と、同時期の他遺跡出土鉄滓の形状を比較することで、古墳周辺で行われた祭祀の痕跡として、古墳時代中後期の鍛冶関連遺物の存在を認識するに至った(立谷 2022a)。



1. SX12012  
2. SK13425  
3. ST13415

図4 中原遺跡出土鉄器 (1/5)



- |                                |                            |                           |
|--------------------------------|----------------------------|---------------------------|
| 1. ST12032 O-41 No.20 (I類)     | 5. ST11158 畔より東側 (II類)     | 9. ST11141 U-39 周溝 (III類) |
| 2. SX12012 (I類)                | 6. ST11158 Y-42・43 区画 (乙群) | 10. SK1014 No.3 (乙群)      |
| 3. ST11067 P-37・38 区画 墳丘部 (甲群) | 7. ST11141 U-39 周溝 (II類)   | 11. SK1014 No.10 (IV類)    |
| 4. SH11230 (甲群)                | 8. ST11002 R-36 周溝 (III類)  |                           |

図5 中原遺跡出土鍛冶関連遺物の諸例 (S=1/5)

#### 4. 中原遺跡出土鍛冶関連遺物の分類 (図5)

続いて、東上遺跡表採鍛冶関連遺物に対する観察軸とするため、本節ではまず、中原遺跡出土鍛冶関連遺物に対する筆者の検討・分類方法を整理する。

##### (1) 中原遺跡出土椀形滓の分類

鉄滓の分類については、鍛冶炉の床面(炉床)の形状を反映する可能性が高く、形態の比較が可能な椀形滓を対象とした。中原遺跡出土椀形滓は以下の大きく四つに分類が可能であった。

**I類鉄滓**：下面の湾曲度合いが低く、上面中央が窪み、断面形が皿形に近いもの。

**II類鉄滓**：下面の平坦部が狭く、断面が凸レンズ状を呈するもの。上面は大きく窪む傾向にある。

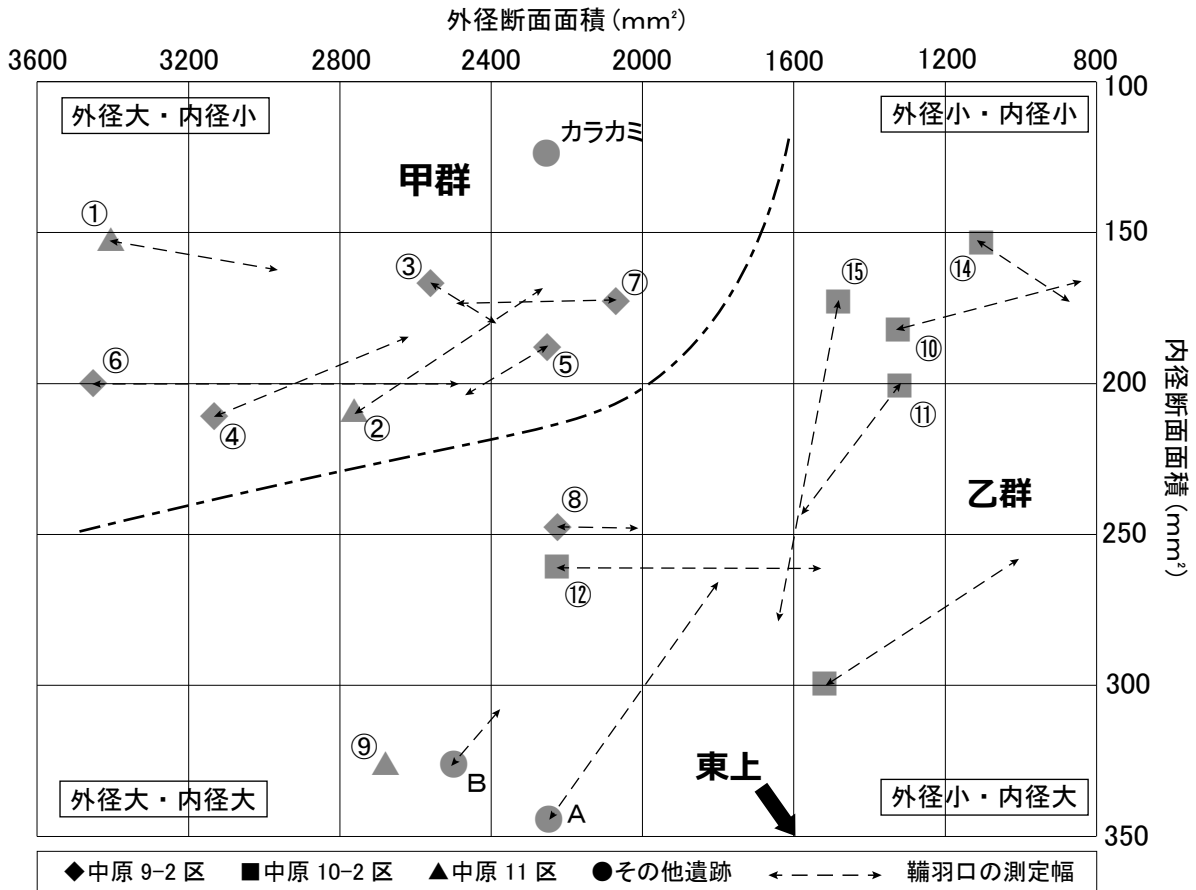
**III類鉄滓**：下面が丸みを帯び、断面が半円形に近い形状を持つもの。上面の窪みはほぼなく、平面またはわずかな凸面をなす場合もある。

**IV類鉄滓**：下面の平坦部が広く、断面舟形(逆台形)を呈するもの。上面は平面またはわずかな凸面をなす。他の類型と比べて大型で重厚な傾向にあり、想定される炉床も最も広い。

##### (2) 中原遺跡出土羽口の分類

中原遺跡の場合、出土地区ごとの羽口に形態・胎土の違いがみられた。この形態の差異を抽出するため、計測可能部位の両端二箇所を設定し、各内・外径断面面積の比較を試みたところ、形態と胎土の差異に対応するように、二種に区分できることが明らかになった(図6・註1)。なお、中原遺跡以外の出土羽口については、第5・6章にて詳述する。

**甲群羽口**：軟質で胎土に白色砂粒を多く含み、「外径大・内径小」付近で測定幅を示す。調査報告者の小松讓氏が「肉厚円筒形羽口」と呼称する一群が該当する(小松 2013)。「外径大・内径小」に測定値がまとまるということは、重厚な羽口ながら、内側の送風孔は狭いという特徴を反映していると考えられる。



遺跡	番号	掲載元 図番号	分類	出土位置 ・遺構等	時期
中原	①	図93-1	甲	SH11230	古墳 前期前半
	②	図207-1	甲	ST11067 P-37・38墳丘部	古墳前期 ～古墳中期
	③	図93-3	甲	P-30 包含層	弥生後期 ～奈良時代
	④	図94-1	甲	9-2区包含層	
	⑤	図94-2	甲	P-30包含層	
	⑥	図94-3	甲	SD9001最下層	
	⑦	図94-4	甲	SD9002最下層	
	⑧	図93-5	乙	SD9002 1層	弥生後期 ～奈良
	⑨	図207-2	乙	ST11158	古墳後期
	⑩	図119-1	乙	SK1014	奈良時代
	⑪	図119-2	乙		
	⑫	図119-3	乙		
	⑬	図119-4	乙		
	⑭	図119-5	乙		
	⑮	図119-6	乙		
竹	A	89図-2	乙	SX31	古墳中期
松	B	第166図	乙	S11	奈良時代～
カラカミ	図88	甲	Bトレンチ		弥生後期

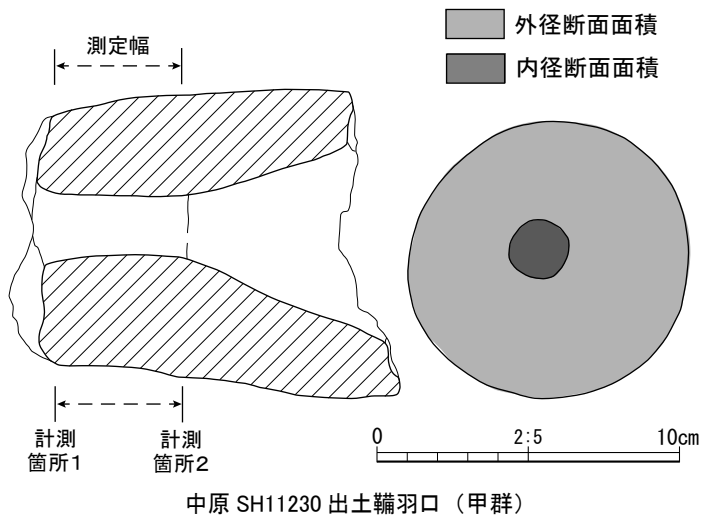


図6 羽口の計測比較

乙群羽口：胎土が緻密、または硬質であり、「外径小・内径小」から「外径小・内径大」間で測定幅を持つ一群である。測定値の分布が散在する点からは、更なる細分の余地を残しているものの、同一の資料内での測定値の幅からは、送風孔が占める割合が多いことが読み取れるほか、鍛冶炉へ向けて風を絞る（送風孔を狭くする）など、送風能力の改良を示している可能性がある。

以上の分類を行った中原遺跡出土鍛冶関連遺物の想定帰属時期を表2に示した。Ⅱ・Ⅲ類などの古墳周溝出土品は、より後出する可能性があり、基本的にⅠ類鉄滓が継続的に存在したと考えられるなか、他の椀形滓・羽口は、「Ⅱ→Ⅲ→Ⅳ類、甲→乙群」へ推移したものと推定される（註2）。

表2 中原遺跡出土鍛冶関連遺物の推定変遷

遺物分類 時期区分		椀形滓				羽口	
		I類	II類	III類	IV類	甲群	乙群
弥生	後期後半新 (惣座1式)	■					
	終末期 (惣座2式)	■					
古墳	前期初頭 (タヶ里式古)	■					
	前期前半 (タヶ里式新)	■				■	
	前期中葉 (土師本村1)	■				■	
	前期後半 (土師本村2)	■				■	
	前期末 (小松1期)	■				■	
	中期初頭 (小松2A期)	■				■	
	中期前半 (TK73)	■				■	
	中期中葉 (TK216)	■	■	■		■	
	中期後半 (TK208~23)	■	■	■		■	
	中期末 (TK47)	■	■	■		■	
	後期初頭 (MT15)	■	■	■		■	
	後期前半 (TK10)	■	■	■		■	
	後期中葉 (TK43)	■	■	■		■	
	後期後半 (TK209)	■	■	■		■	
	飛鳥	終末 (TK217)	■	■	■		■
I期		■	■	■		■	
奈良	大宰府	II・III期	■	■		■	
		IV・V期	■	■		■	

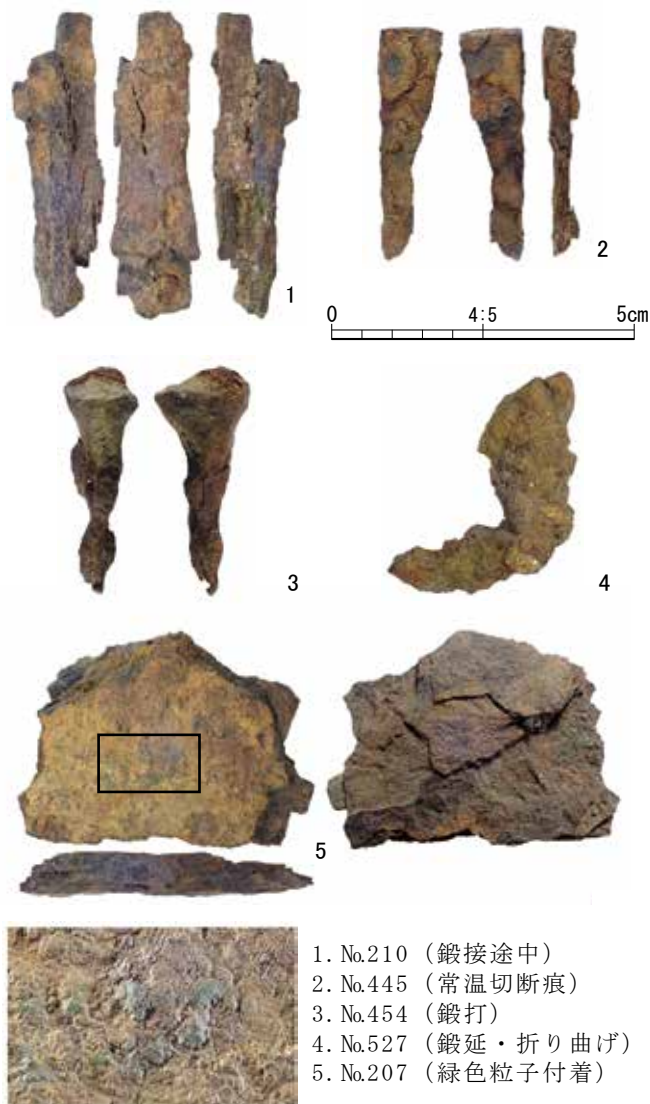


図7 鍛冶痕跡を持つ鉄製品 (S ≒ 4/5)

## 5. 東上遺跡表採鍛冶関連遺物についての観察所見

2023年末までの現状で、東上遺跡から採集された鍛冶関連遺物は59点を数える(表3)。なかには、No.33・471やNo.447・452のように、小型丸釘や工具・蝶番など、現代の鉄製品と認定できるものも存在する。しかしながら、それ以外の採集品は、層状剝離が明瞭に確認でき、鍛打を繰り返して製作されたと考えられる資料が多数を占める。この他には、皿・椀形の鉄滓や(No.35・431・521など)、羽口片と思われる土製品(No.520)などが表採されており、採集地周辺での何らかの鍛冶操業が行われていたことを彷彿とさせる。本章では、先述した中原遺跡出土鍛冶関連遺物の分類案を準用しつつ、東上遺跡表採鍛冶関連遺物の観察結果についてまとめることとする。

### (1) 鍛冶痕跡を持つ鉄製品(図7)

採集品のなかで、主な製作技法の痕跡が認められる資料を抜粋し、図7に提示した。

No.210(図7-1)やNo.470は、二つ以上の棒状素材を鍛接途中のものと考えられ、東上遺跡において、素材を鍛接し、より大型の素材を造り出すことができた可能性を示唆する。

No.445(図7-2)は、刀子の茎部片と推定される。刃部を欠損しているが、明瞭な切断痕が確認できることから、土中で破損したものではなく、鑿などにより常温切断されたものと考えられる。

表3 東上遺跡表採鍛冶関連遺物観察概要表

No.	種別/器種	法量 (cm・g)				備考 (観察所見)
		長	幅	厚	重量	
31	刀子?	3.8	0.9	0.22	10g未満	明瞭な刃部無し。棒状素材の可能性もあり。層状剥離進行。
32	刀子?	5.8	1.6	0.52	10g	明瞭な刃部無し。棒状素材の可能性もあり。層状剥離進行。
33	釘?	(4.5)	0.5	0.5	20g	鉄の周囲に多数の土砂が錆着する。現代釘か。
34	釘?	4.4	0.3	0.35	10g	鉄の周囲に多数の土砂が錆着する。断面方形。
35	鉄滓	7.0	5.3	1.8	110g	椀形滓 (Ⅲ類鉄滓)。上面中央がわずかに窪む。
207	素材	4.9	3.5	0.67	30g	鍛接痕跡、緑色付着物あり。
208	鉄片	2.9	1.9	0.3	10g未満	三角または又状か。全面に土砂が錆着する。
209	鉄釘	(3.2)	1.5	1.5	10g	現代釘複数本が錆着。水系状の繊維付着。
210	素材	4.0	1.1	1.1	10g未満	二つの鉄素材を鍛接中。層状剥離進行。
431	鉄滓	5.5	5.4	0.39	40g	皿状滓 (Ⅰ類鉄滓)。砂粒などの付着無し。
432	素材?	4.3	3.9	0.20	20g	厚みが一定でなく、0.05cm程のバラツキあり。
433	釘?	(4.1)	0.5	0.5	10g未満	剥離進行。現代釘か。
443	茎?	2.2以上	0.6	0.5	10g未満	断面方形。刀子や鉄鏃の茎部の破片か。
444	釘?	2.3以上	0.6	0.5	10g未満	断面隅丸方形。刀子や鉄鏃の茎部の破片、または釘か。
445	刀子	3.8	1.0	0.39	10g	刀子の茎部。刃部側に切断痕跡ありか。
446	刀子+鉄滓	(3.7)	(2.2)	1.35	20g	刀子状鉄製品が皿状滓 (Ⅰ類) に錆着。炉床に落ちたか
447	不明	3.6	1.6	0.12	10g未満	断面L字状。現代金具か。
448	刀子?	2.95	1.1	0.4	10g未満	刀子の茎部端か。
449	茎?	3.1	0.55	0.45	10g未満	断面方形。刀子や鉄鏃の茎部の破片か。
450	鉄片	1.85	1.1	0.25	10g未満	長方形鉄片。層状剥離進行。
451	不明	5.2	4.0	0.9	40g	砂礫が付着。蝶番金具か。
452	鋸?	6.5	3.1	0.34	30g	現代の鋸か。棟がわずかに膨らむ。
453	鉄滓	(3.3)	(1.3)	0.85	10g	椀形滓 (Ⅰ類鉄滓)。底面に炉床由来の黒褐色土付着。
454	釘	3.3	1.4	1.05	10g	先端から頭部に向け断面丸→隅丸方形。鍛打による凹み複数あり。
455	鉄片	3.15	2.2	0.51	10g	明瞭な刃部無し。素材か。層状剥離進行。厚み・幅的には鉄剣でも可。
456	鉄片	(2.6)	1.2	0.34	10g	やや湾曲した長方形。層状剥離進行。
457	鉄片	(1.7)	0.5	0.47	10g未満	先端付近のみ残存。断面形の変化は454に類似。
458	鉄片	(1.4)	0.3	0.3	10g未満	先端付近のみ残存。断面丸。
459	鉄鏃?	(3.2)	1.0	0.9	10g	断面隅丸方形。鉄鏃の茎部か。鉄本体に直交する有機物の線あり。
460	刀子?	(5.1)	1.3	0.6	10g	刀子の刃部片か。層状剥離進行。
461	製品?	3.1	2.3	0.61	10g	層状剥離進行。剥離によって元々の形状不明。
462	鉄片	3.0	0.8	0.54	10g	元々は剣・刀の刃部片か。層状剥離進行。
463	鉈?	(3.0)	1.0	0.48	10g	断面方形→三日月形。厚みにバラツキあり。未製品か。
464	鉄片	2.4	1.4	0.2	10g未満	不定形鉄片。製品から剥離したものか。
465	刀子?	1.95	0.8	0.34	10g未満	層状剥離進行。小片だが刃部あり。
466	鉄片	1.9	1.1	0.23	10g未満	不定形鉄片。層状剥離進行。
467	鉄片	1.5	1.2	0.17	10g未満	不定形鉄片。製品から剥離したものか。
468	釘?	(2.5)	0.7	0.55	10g	錆着した土砂により形状不明瞭。現代の丸釘か。
469	鉄鏃?	(1.9)	0.9	0.5	10g	459に類似。鉄本体周りに有機物が錆着か。
470	素材?	1.1	1.1	0.86	10g	二つ以上の鉄素材を鍛接中か。層状剥離進行。
471	釘	2.9	0.35	0.3	10g	全体に土砂が錆着。断面円形。現代釘か。
472	刀子?	(1.1)	0.8	0.4	10g未満	断面菱形。刀子・鏃の茎部先端か。
473	釘	2.0	0.4	0.3	10g未満	全体に土砂が錆着。断面円形。現代釘か。
474	釘	(2.4)	0.5	0.4	10g未満	454に類似 (先端部付近)。断面丸→隅丸方形。
475	釘	2.3	1.3	1.2	10g未満	454に類似 (頭部付近)。錆着した土砂により形状不明瞭だが完形か。
520	羽口?	(5.7)	(6.1)	1.8	80g	比熱痕跡無し。羽口の基部か。胎土内にφ2~10mmの長石片含む。
521	鉄滓	8.1	(5.6)	2.7	180g	椀形滓 (Ⅲ類鉄滓)。片側に羽口由来の融解した土砂付着。
522	鉄滓	4.0	2.8	1.6	20g	皿状滓 (Ⅰ類鉄滓)。下面に炉床由来の岩石付着。
523	鉄滓	3.6	3.2	2.65	40g	不定形滓 (未分類)。羽口由来と思われる土砂付着。
524	鉄滓	3.3	2.2	1.8	10g	不定形滓 (未分類)。羽口由来と思われる土砂微量付着。
525	素材+鉄滓	2.0	1.7	1.5	10g未満	不定形滓 (未分類)。上面に断面方形の棒状素材付着。
526	素材?	1.8	1.5	0.82	10g未満	全体に土砂が錆着し、形状不明。方形の鉄素材か。
527	釣針	3.6	(0.7)	0.6	10g	軸部付近土砂に覆われ形状不明瞭。先端部断面不定形円。
528	釣針?	2.9	0.8	0.7	10g未満	527に類似。釣針の軸部か。
529	釘	5.3	0.6	0.6	10g未満	頭部欠損。層状剥離進行。断面丸。
530	釘	2.4	1.0	0.9	10g未満	頭部付近のみ残存。断面丸。
531	製品?	1.9	1.7	1.5	10g未満	トタン片か? 小型の丸釘が1点付着。
532	釘?	2.4	0.7	0.56	10g未満	断面円形 (半円形に破損)。釘の先端部か。
533	鉄片	1.7	0.8	0.45	10g未満	不定形鉄片。層状剥離進行。

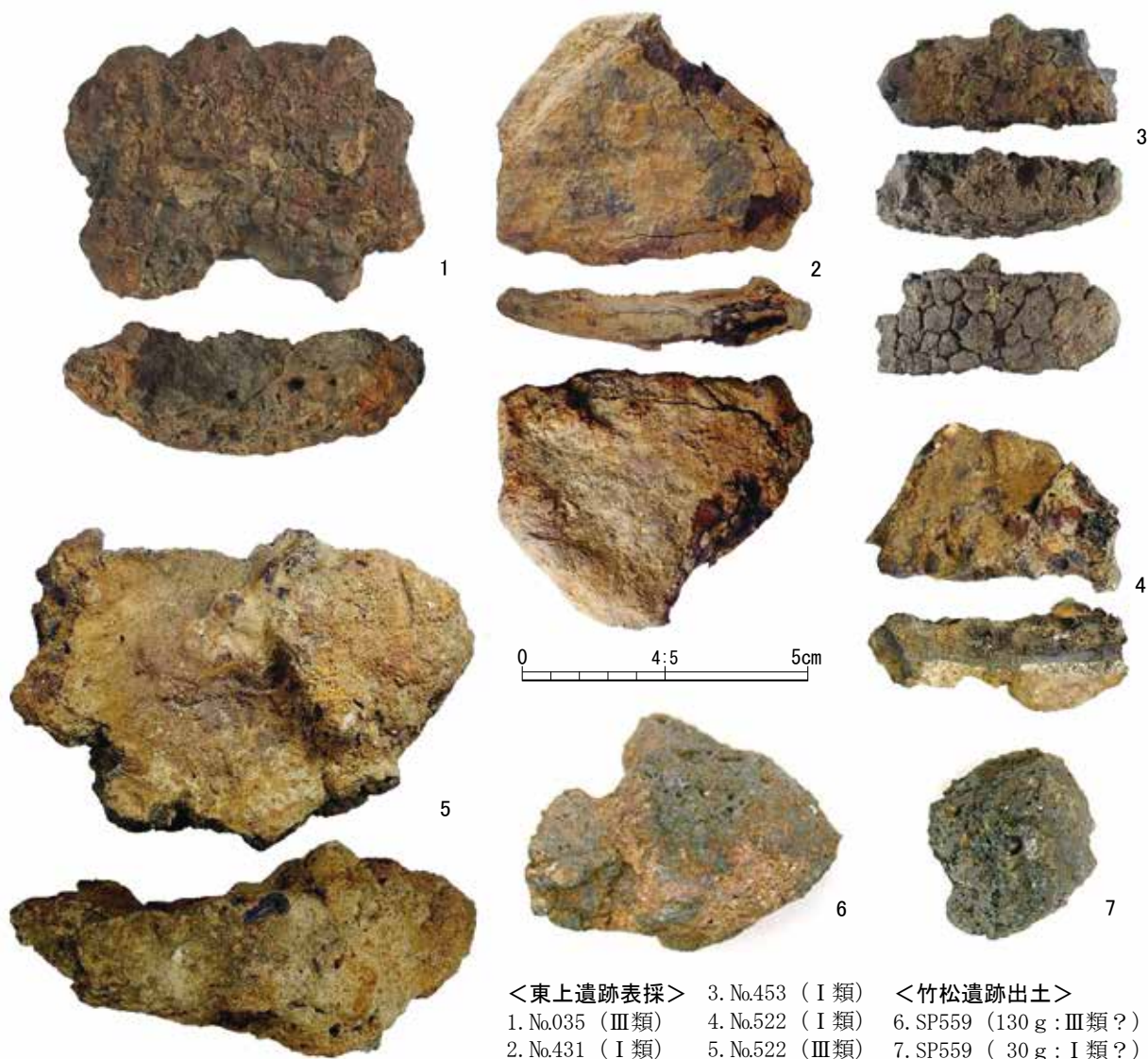


図8 東上遺跡表採・竹松遺跡出土椀形滓 (S ≒ 4/5)

No.454 (図7-3)は、幅太の丸釘と考えられるものであり、鍛打による複数の凹みによりいびつながら、先端部から頭部に向けて断面丸から隅丸方形へと形状が変化していることが観察できる。

No.527 (図7-4)は、ほぼ全体が錆着した土砂に覆われているが、その形状から釣針であると考えられ、断面隅丸方形の軸部から先端部に向かって、断面が円形へと推移しているものと想定できる。全長4cmにも満たない小型品だが、釣針の存在は素材の鍛延・折り曲げが可能だったことを示す。

以上のように、東上遺跡表採資料からは、鍛打・裁断・鍛延・折り曲げ成形・鍛接のように、日本列島における鉄器製作技術(村上2007)が一通り揃っていることが確認できる。

また、No.207 (図7-5)は、板状を呈し、大型素材とも考えられるものだが、表面に緑青のように見える緑色の付着物も確認できる。同様の付着物は、12号報告にて縄文土器の底部ではないかとされた「黒鉛混和土器」にも認められるため、東上遺跡での鉄以外の金属器生産の可能性を持つものとして、今後の分析などの成果が期待される。

## (2) 椀形滓(図8)

東上遺跡からは、湾曲度が弱く扁平なⅠ類鉄滓が4点、湾曲度が強く、典型的な椀形を呈するⅢ類鉄滓が2点、分類不能な不定形滓が3点、現状において採集されている。

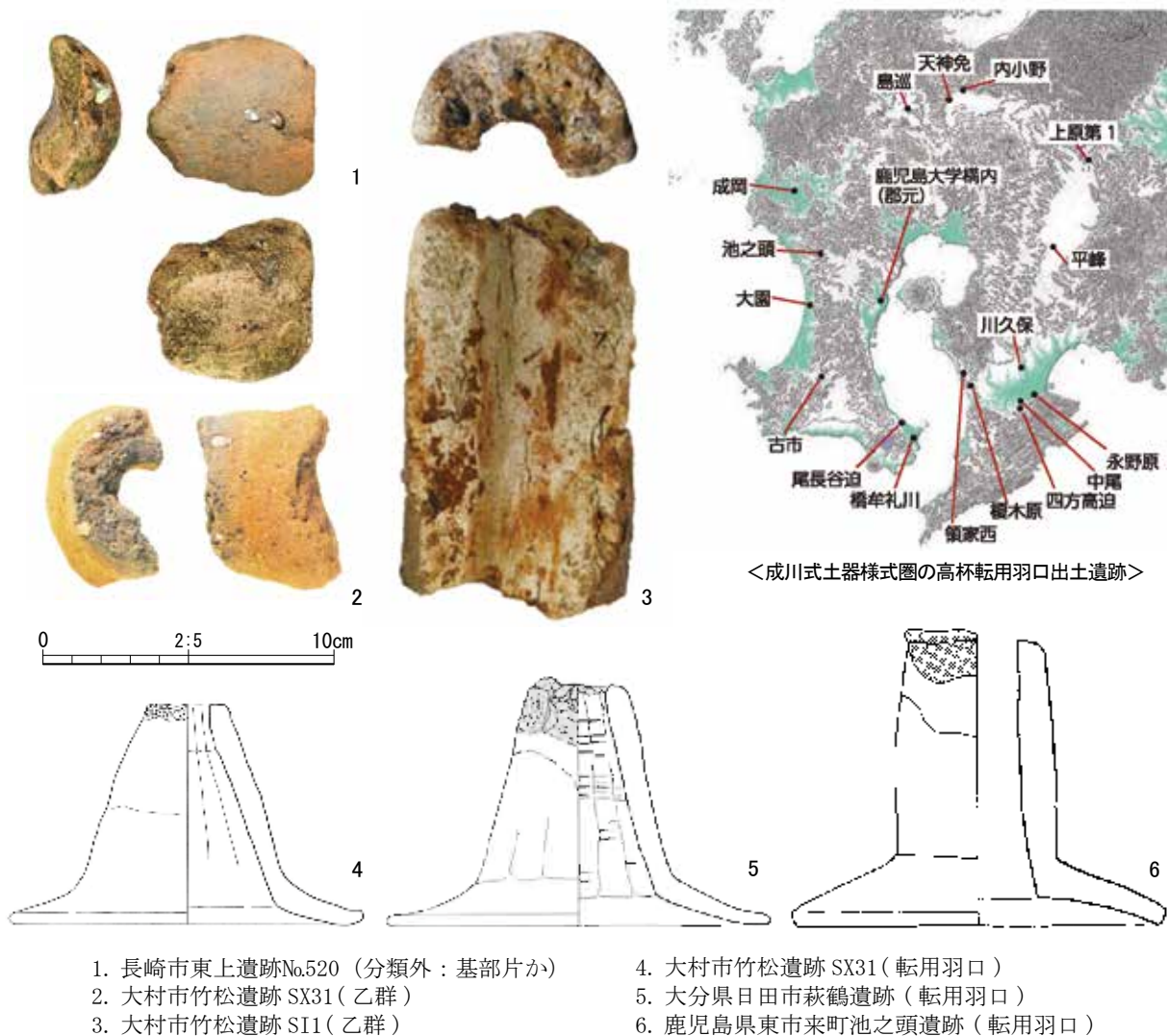


図9 東上遺跡表採土製品と九州島出土転用羽口の諸例 (S = 2/5)

4点のI類鉄滓に着目すると、同じI類鉄滓内でも、比重(鉄の含有量差か)の差異や、上面・底面の付着物の違いなどが顕著に認められ、用途や構築された炉床の違いを反映している可能性がある。

なお、No.521鉄滓(図8-5)は、現状の表採資料の中で最も重く大きい資料であるとともに、長軸方向の片側に融解した羽口片が付着しており、遺跡内での羽口使用を裏付けるものと考えられる。

### (3) 不明土製品(羽口片か)

細片のため断定することは困難であるが、羽口の可能性がある土製品(図9-1)についても触れておきたい。当該土製品の胎土中には藁や籾殻などの植物片の混和は確認できないものの、 $\Phi 2 \sim 10 \mu\text{m}$ の白色粒子を含んでいる。表面に被熱痕や融解も認められないが、これは羽口の基部にあたるためとも考えられる。送風孔とみられる内部の空洞は、中央からやや偏っているものの、外径・内径を正円に復元した場合、内径 $400 \sim 700 \text{mm}$ 、外径 $1300 \sim 1800 \text{mm}$ と大きく他の羽口から逸脱した計測値を示す(図6)。この傾向は、基部に向かってラッパ状・漏斗状に開く送風孔を持つ羽口の計測傾向と類似しており、当該資料が羽口の基部付近の破片である可能性を高める。胎土中にやや大振りの白色粒子を含み、軟質な胎土は、中原遺跡出土資料(甲類)や竹松遺跡出土資料(図9-2:乙類)とも類似点を持つ。したがって、中原遺跡との比較のみで東上遺跡の鍛冶操業を評価することは難しい。

よって次章では、中原遺跡以外の関連資料にも着目し、東上遺跡の鍛冶関連遺物との比較を試みる。

## 6. 東上遺跡周辺の比較検討資料

現状、東上遺跡に最も距離的に近い鍛冶関連遺物の出土遺跡は、管見の限り、大村湾東岸の扇状地上に位置する竹松遺跡である。竹松遺跡は、新幹線・道路敷設に伴い平成24～28年にかけて行われた大規模調査により、旧石器時代～近世にわたる複合遺跡であることが再認識された。特に、古代～中世の建物群や初期貿易陶磁をはじめとする遺物群は、近隣の発掘調査の空白を埋める重要なものであり、古代～中世に属する、小礫を含まない精選された胎土を持つ羽口（図9-3）も出土している（川畑ほか編 2017）。この長崎県教育委員会が実施した調査では、古墳時代に属する建物跡は、40棟を数えるほか、5世紀後半頃の土器の時期を伴う柱穴 SP559からは、鉄滓が2点出土している（図8-6・7）。底面の写真により確定はできないが、前者が最大厚3㍉、後者が最大厚2.2㍉と報告されており、それぞれⅢ・Ⅰ類の椀形滓である可能性がある。今後実見にて検証したい。

また、平成30年～令和元年に大村市教育委員会が行った竹松遺跡の調査では、6世紀後半の鍛冶遺構から、羽口（図9-2）とともに、転用羽口（図9-4）が出土している（柴田編 2022）。

九州出土の高坏転用羽口については、宮崎県平峰遺跡の調査報告内で集成作業が行われており、大分・宮崎・鹿児島県の3県・18遺跡が集計されている（加藤編 2012）。このうち、大分県は2遺跡のみであり、九州南部に転用羽口（図9-5・6）が集中している様相がうかがえる。

九州の転用羽口の時期については、大分県の資料が5世紀前半、九州南部の2県の資料が5世紀前半～6世紀前半に収まるようであり、竹松遺跡出土例に先行する（野島 1997、加藤編 2012）。

以上、竹松遺跡内の同一遺構から専用・転用羽口の両者が出土したこと、九州の転用羽口に対する従来の想定時期よりも年代が下ることは、大村湾周辺の鍛冶技術の系譜を考える上で重要である。

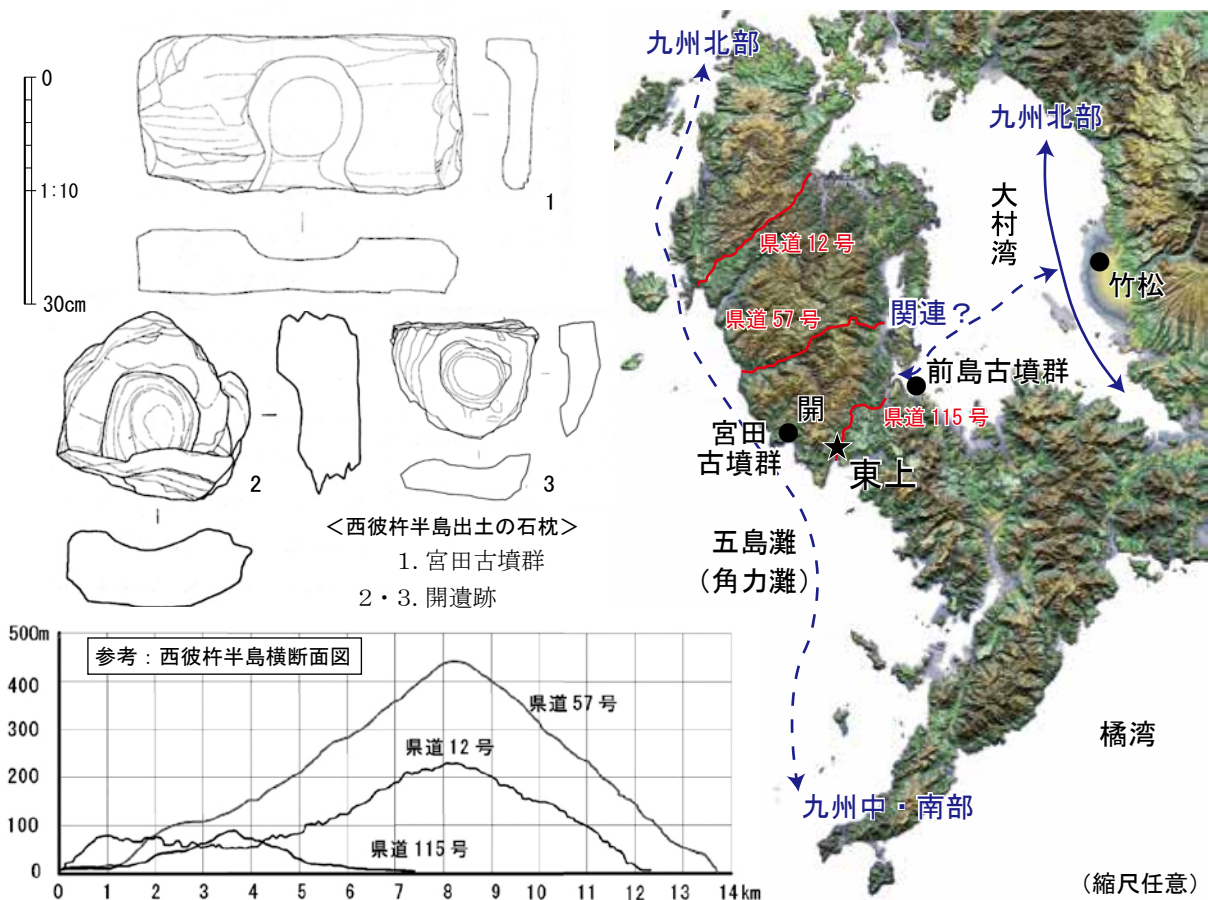


図10 東上遺跡周辺の参考資料（遺物・地理的環境）

表4 東上遺跡鍛冶関連遺物の推定時期

比較資料	古墳時代								飛鳥時代	奈良時代
	中期				後期					
	前半	中葉	後半	末	前半	中葉	後半	終末		
開遺跡 宮田古墳群										
竹松遺跡 SX31										
竹松遺跡 SP559										
中原遺跡 Ⅲ類鉄滓										
前島古墳群										
東上遺跡 鍛冶関連遺物				現状想定時期						

九州南部では、地下式横穴墓や板石積石棺墓などから、圭頭鏃など地域独自の製作品が多く出土していることは従来から指摘されており、高杯転用羽口による小型鉄器の地域生産が考察されている(黒川 2012、橋本 2015など)。また、東上遺跡にほど近い開遺跡では、圭頭鏃3本、腸袂柳葉鏃2本以上が石棺墓群から出土していることにくわえ(古門 2023、註3)、隣接する宮田古墳群からは、熊本・天草地方との影響が指摘されている石枕が出土している(図10:左上)。これら両遺跡は、5世紀代の墳墓造成が推定されている(野澤 2013)。

以上のように、東上遺跡周辺で出土している鍛冶関連遺物や墳墓出土資料は、おおむね5世紀代～6世紀前半と推定されるものが多い。この時期は、中原遺跡において古墳群が連続して築かれる時期とも重なる。中原古墳群から多くの鍛冶関連遺物が出土していることは先述のとおりである。

したがって、東上遺跡の鍛冶関連遺物を評価するためには、竹松遺跡などの近隣の遺跡から出土した鍛冶関連遺物や副葬鉄器の様相を整理し、鍛冶技術の系譜や副葬鉄器の由緒(在地生産・搬入など)について、北・南の両方向からの影響を紐解いていく必要があると考えられる(図10:右)。

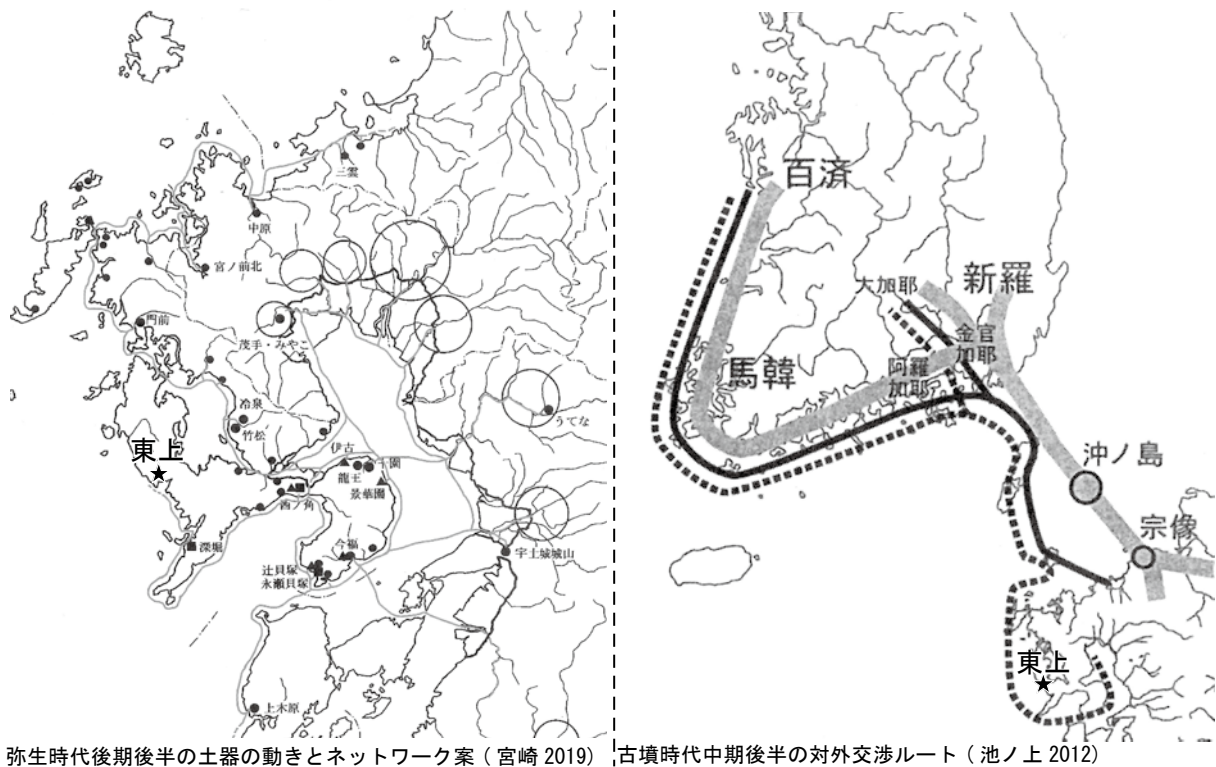
## 7. 東上遺跡表採鍛冶関連遺物の推定時期

ここでは、前章で述べた周辺遺跡の状況や、東上遺跡の立地の特徴、出土椀形滓の形態から、現時点における東上遺跡の鍛冶関連遺物の帰属時期について私見をまとめることとする。

前章の周辺遺跡の鍛冶関連遺物や副葬鉄器の時期からは、古墳時代中期後半～後期代の時期幅が想定される。この想定は、中原遺跡出土Ⅲ類鉄滓の想定年代とも大きく矛盾しない。

また12号報告にて、西彼杵半島西岸(五島灘)から大村湾へ抜けるルートとして、3つの県道の高低差が整理されている(図10:左下)。この断面図により、東上遺跡が立地する長崎市三重町から、長崎市西海町(西海川河口)へ伸びる県道115号線は、最も高低差なく角力灘沿岸から大村湾側へ抜けるルートであることがわかる。さらに、西海川河口から大村湾東岸への海上ルート上には、前島・ダケク島の2島に築かれた前島古墳群が立地する。前島古墳群については、野澤(竹中)哲朗氏によって古墳群の築造時期が検討され、古墳時代中期～後期初頭頃のものと考えられている(竹中 2001、野澤 2022)。こちらの時期も、先述した周辺遺跡の鍛冶関連遺物の時期から逸脱するものではない。

以上、周辺の造墓動向・鍛冶関連遺物・副葬鉄器などを加味したにすぎないが、東上遺跡の鍛冶関連遺物の時期を古墳時代中期中葉～後期中葉頃と現状では想定しておきたい(表4)。



弥生時代後期後半の土器の動きとネットワーク案（宮崎 2019） 古墳時代中期後半の対外交渉ルート（池ノ上 2012）

図11 東上遺跡（西彼杵半島）の位置と九州西岸の交易ルート

## 8. おわりに（まとめと展望）

本稿では、東上遺跡表採鍛冶関連遺物に対し、中原遺跡の鍛冶関連遺物の筆者分類を準用しつつ、その観察結果の概要を示した。複数のバリエーションを持つⅠ類鉄滓や、表採地に点在する被熱痕を持つ礫群の存在からは、表採地周辺で行われた活発な鍛冶操業を想起させるには十分である。

今後、東上遺跡の表採遺物群が、短期間の大規模操業を示す痕跡なのか、または長期にわたる操業の蓄積の結果なのかという問いについては、研究の進展により明らかになるものと期待したい。

東上遺跡が位置する西彼杵半島は、古代以降滑石製石鍋の生産拠点として知られる。その一方、古代以前の西彼杵半島西岸に広がる五島灘を人々が往来していたと考えられる痕跡は乏しく、弥生時代後期～古墳時代研究において、当該地の遺跡・遺物が語られることは極めて少ない（図11）。

このような従来の認識に対し、東上遺跡の鍛冶関連遺物の存在は一石を投じるものである。研究の進展により、本稿での想定とは異なる時期の産物であったとしても、西彼杵半島西岸から鍛冶関連遺物がみつかるという重要性は損なわれるものでない。また、仮に本稿の想定時期内に収まるとすれば、百済との同盟を契機とした朝鮮半島出征の時期と重なってくる。

中原遺跡の中後期古墳からは、鍛冶関連遺物だけでなく、馬具や陶質土器が出土している。また、阿蘇山麓周辺地域では、5世紀前半～6世紀前半の殉葬馬痕跡や製塩土器が集中してみつまっている。これらのことから、肥後の合志郡・阿蘇郡で生産された馬を、肥前唐津・全羅道経由で百済に送るシステムが構築されたと推定する向きもある（桃崎 2022、註4）。生産馬の輸送という視点から、九州中部地域と唐津平野の関連性を指摘した桃崎氏の説は、朝鮮半島出征において、東上遺跡近辺を往来したと思われるルートの活発化を想像させるには十分である（註5）。

しかし、先述したとおり、古墳時代の九州西岸ルートの痕跡は、中間地点である西北九州地域において特に乏しい。今後、既存の副葬鉄器やその他の遺物について再検討を行い、現状を整理することが急務であろう。これにより、結果的に東上遺跡の評価も定まってくることを期待し、結びとしたい。

## 【謝辞】

本稿は、冒頭に述べたとおり、2023年10月の現地踏査、遺物検討会の場を設けていただいた片山巳貴子氏、竹田ゆかり氏、古門雅高氏、渡邊康行氏のご厚意がなければ執筆すること自体がかなわなかったものである。

特に、採集遺物とその撮影（図版使用写真）など、本稿の核となる資料は、渡邊康行氏のご尽力の結果をご提供いただいたものである。改めて深く感謝の意をここに表したい。

また、唐津市教育委員会の鮎川和樹氏・美浦雄二氏や、西海考古同人会の古門氏には、参考文献の提供・貸与や、図版の提供などのご協力を賜った。末筆ながら感謝申し上げます。

## 【註】

- 註1 『七隈史学』24号に掲載いただいた拙稿（立谷 2022a）では、羽口の計測数値（縦横軸）の提示が誤っていたため、本稿では修正を行ったものを再提示している。
- 註2 本稿における時間軸は、『中原遺跡Ⅴ』（小松ほか編 2011）の古墳編年、『中原遺跡Ⅶ』（小松ほか編 2013）の集落変遷、『中原遺跡Ⅸ』（小松 2015）の流路変遷を軸とし、『集落と古墳の動態』をテーマとした各地域の論考（美浦 2018、野澤 2022など）や、各報告書を参考に設定している。
- 註3 現地踏査・遺物検討会の際に、立ち寄った外海歴史民俗資料館において、中村和正氏のご好意により、開遺跡・宮田古墳群の出土資料を実見する機会を得た。
- 註4 大阪府東大阪市日下の植附1号墳の周溝からは、TK216型式の須恵器や韓式土器、鉄滓、馬の上顎骨が出土しており、馬に関する職掌を持った渡来系馬飼・鍛冶集団の人員が被葬者とされ、日下部はこのような技能集団に由来することが考えられている（福永編 1999、桃崎 2014）。また、中原遺跡の奈良時代の溝からは、「日下部」の文字が墨書された木簡が二点出土しているほか、『肥前国風土記』の「松浦郡」・「賀周の里」条には、弟日姫子（松浦佐用姫）や大屋田子を「日下部の祖」や「日下君等が祖」とする記述がみられる。これらの点から、古墳時代中期以降の中原古墳群の被葬者を日下部の前身集団と考え、古墳時代中期末以降に再形成される集落は、日下部氏の拠点となっていた可能性が指摘されている（桃崎 2014、小松ほか編 2015）。
- 註5 古墳時代中後期の九州中・南部と唐津湾岸を繋ぐルートについては、西彼杵半島西岸の外海航路だけでなく、大村湾内をとおり、壱岐水道へと抜ける航路や、大村湾岸から伊万里湾岸や武雄盆地を通る内陸路など複数のルートの存在も想定され、各ルートの動向がどこまで追えるのかを精査する必要がある。

## 【引用・参考文献】

- 池ノ上宏 2012 「筑前東部の諸勢力と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』九州前方後円墳研究会 433-446頁
- 井関弘太郎 1982 「(2) 唐津平野の地形発達と環境変化」『末盧国』唐津湾周辺遺跡調査委員会 8-17頁
- 加藤 徹ほか編 2012 『平峰遺跡（3次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター
- 蒲原宏行 2019 『弥生・古墳時代論叢』六一書房
- 川畑敏則ほか編 2017 『竹松遺跡Ⅱ』長崎県教育委員会
- 黒川忠広 2012 「鹿児島県における古墳時代の鍛冶関連資料の紹介」『縄文の森から』第5号 鹿児島県立埋蔵文化財センター 16-27頁
- 小嶋 篤 2022 「遠賀川流域の古墳と集落—造墓秩序と生活圏—」『集落と古墳の動態Ⅲ』九州前方後円墳研究会 65-118頁
- 小松 讓 2002 「肥前地域における古墳時代中・後期土師器編年」『古墳時代中・後期の土師器』九州前方後円墳研究会 44-71頁
- 小松 讓ほか編 2011~15 『中原遺跡Ⅴ~Ⅸ』佐賀県教育委員会
- 小松 讓 2014 「2, 中原遺跡出土の弥生時代終末~古墳時代前期の鍛冶関連遺物」『中原遺跡Ⅷ』佐賀県教育委員会 400-421頁
- 小松 讓 2015 「Ⅷ. 総括」『中原遺跡Ⅸ』佐賀県文化財調査報告書第208集 佐賀県教育委員会 393-399頁
- 柴田 亮編 2022 『竹松遺跡』大村市教育委員会
- 竹中哲朗 2001 「前島古墳群の検討」『西海考古』第4号 91-100頁
- 立谷聡明 2022a 「唐津・中原遺跡における鍛冶関連遺物の再検討」『七隈史学』第24号 69-88頁
- 立谷聡明 2022b 「古墳出現前夜における鉄製武器からみた地域間交流」『西海考古』第12号 33-52頁

- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園研究編集第10号 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店
- 土屋了介 2014 「中原遺跡出土鉄製品・鉄片に関するまとめ」『中原遺跡Ⅷ』佐賀県教育委員会 422-437頁
- 野澤哲朗 2013 「第4章 古墳時代の長崎 第4節 地域に残る古墳」『新長崎市史』第1巻 長崎市418-429頁
- 野澤哲朗 2022 「長崎地域の集落と古墳の動態」『集落と古墳の動態Ⅲ』九州前方後円墳研究会 155-179頁
- 野島 永 1997 「弥生・古墳時代の鉄器生産の一樣相」『たたら研究』38号 たたら研究会 1-34頁
- 橋本達也 2015 「成川式土器と鹿児島古墳時代研究」『成川式土器ってなんだ?』鹿児島大学総合研究博物館 96-102頁
- 福永信雄編 1999 『植附遺跡第5次発掘調査報告書』財団法人東大阪市文化財協会
- 古門雅高 2022 「長崎県長崎市東上遺跡出土の大形成人用甕棺」『老朗漫筆』  
<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/higashiage.pdf>
- 古門雅高 2023 「長崎県本土部の地域集団の存在と動向―弥生時代中期から古墳時代を中心に―」『老朗漫筆』  
<https://saikaikouko.jp/manpitusakuhin/chiikisyudan.pdf>
- 真鍋成史 2003 「鍛冶関連遺物」『考古資料大観7 弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』小学館 274-280 頁
- 美浦雄二 2018 「唐津平野周辺地域の集落と古墳の動態について」『集落と古墳の動態Ⅰ』九州前方後円墳研究会 411-433頁
- 宮崎貴夫 2019 『長崎地域の考古学研究』昭和堂
- 宮下雅史ほか 2022 「長崎市三重地区・東上遺跡について」『西海考古』第12号 131-160頁
- 宮下雅史 2013 「第3章 弥生時代の長崎」『新長崎市史』第1巻 長崎市
- 宮田洋一編 2002 『池之頭遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 村上恭通 2007 『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 村上恭通 2020 「唐津・中原遺跡における鉄器生産とその源流」『再考・末盧国』～知られざる鉄の邑～』唐津市末盧館 9-14頁
- 村上恭通 2022 「古墳時代開始期における鍛冶技術の変革とその背景」『纏向学の最先端』桜井市纏向学研究センター 481-492頁
- 桃崎祐輔 2014 「馬具からみた地域間交流―舶載馬具と国産規格品馬具に着目して―」第17回九州前方後円墳研究会資料集『古墳時代の地域間交流2』九州前方後円墳研究会 188-229 頁
- 桃崎祐輔 2022 『東アジア騎馬文化受容過程の研究』専修大学大学院
- 行時志郎編 1995 『荻鶴遺跡』日田市教育委員会
- ライアン・ジョセフ 2017 「長茎鉄剣の成立過程」『古代学研究』第212号 古代学研究会

#### 【挿図・表出典】

- 図1：カシミール3Dにて作成した地図に加筆。
- 図2：地形図は国土地理院電子地図を使用。甕棺実測図は12号報告より転載。
- 図3：左上地形図は国土地理院電子地図を使用。遺構平面図は『中原遺跡Ⅸ』より転載し加筆。
- 表1：『中原遺跡Ⅴ』・『中原遺跡Ⅷ』を参考に筆者作成。
- 図4：1・2は筆者実測（佐賀県所蔵）。3は『中原遺跡Ⅵ』より再トレース。
- 図5：『中原遺跡Ⅷ』掲載遺物を実見後、一部報告書掲載実測図を修正し再トレース。
- 図6：各報告書掲載実測図を元に計測し作成。
- 表2：『中原遺跡Ⅷ』掲載表、小松 2015、美浦 2018を参考に作成。
- 図7：渡邊氏提供写真を元に筆者作成。
- 表3：表採遺物観察所見を元に筆者作成。
- 図8：6・7は『竹松遺跡Ⅱ』より転載。その他は渡邊氏提供写真を元に筆者作成。
- 図9：1は渡邊氏提供写真。その他の写真・図版は柴田編 2022など報告書より転載。  
 参考分布図は橋本 2015より転載。
- 図10：石枕実測図は野澤 2013より転載。県道横断面図は12号報告より転載。  
 右地図はカシミール3Dにて作成地図に加筆。
- 図11：左図は宮崎 2019、右図は池ノ上 2012より転載
- ※再トレース時の事実誤認による実際の資料との相違がある場合、すべて筆者に責がある。